
ポケモン不思議のダンジョン～葉の救助隊～

猪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン～葉の救助隊～

【Zコード】

N8794Y

【作者名】

猪

【あらすじ】

突然人間からキモリになってしまった葉と、明るく心優しいが臆病なワニノコのベウ。ある時ふとしたことから出会ったこの2人は、救助隊を結成し、力を合わせてさまざまな困難に立ち向かっていく。

プロローグ（前書き）

はじめまして、作者の猪です。このたびは、小説「ポケモン不思議のダンジョン～葉の救助隊～」を読んでくださりありがとうございます。少々長くなると思いますが、どうか最後までお付き合いください。

プロローグ

……………。……………。

そよ風が…気持ちいい…。

……………。……………。

空気が…つま…。

……………。……………。

それにしても気持ちいい…。

……………。……………。

「…………え、ねえつてば…。」

誰かが…呼びかけている…？

「ねえつてば、起きてよーねえ！」

……………。……………。

「ねえつてーもしかして、死んでるの？」

死んでたら返事もできないだろ？が……………。

死んでたら返事もできないだろ？が……………。

.....そうそう、起きるか.....。

プロローグ（後書き）

今回のお話は、主人公である葉の視点でしたが、次回からは、第三
者視点でお送りします。

#モジヒロ（前書き）

第2話です。今回は2人の出会いと自己紹介が主なので物語の進展はほとんどありません。

ベウ「こんなペースで本当に大丈夫なの？」

まあ、はつきり言ってやつてみなきや分からん♪あと、もつすぐ期末テストだから勉強で更新遅くなるかも。

ベウ「今日から連載始めたのに、早くもそんな宣言しちゃうの！？」

ヨウ「つてか、試験勉強しろよ。」

……2人して痛い所突かないで。

#モコヒニーホ

ここは、ポケモンの世界。この世界に人間はおらず、ポケモンのみが平和に暮らしている。そんな世界のある場所に、ポケモン広場とよばれる所があった。広場といっても、そこには多くのポケモンが住み、小さな村のようになつている所だった。

「はあ……。」

ポケモン広場からそう遠くないところにある、名もなき小さな森のなかを、一人のポケモンがため息をつきながら歩いていた。そのポケモンは、小さながらだの割に発達した大きなあご、短めで太い尻尾を持つた、水色のポケモン、ワニーホーである。

「どうしてオレは、こんなに臆病なんだろ

う…。」

そのワードが自分に愚痴った。

「結局今田も、ペリッシュパー連絡所の前でためらつて引寄せ返しからつたよ…。」

ワードは、歩きながらうらじて愚痴り続け
る。

やがて、田に涙をにじませながら言った。

「あいつオレなんか……」の先ずつと臆病な

まあ……一生……。」

つこに泣き出しつとしたその時、ふと、倒れ

てこるポケモンがワードの田に止まった。

「あつ…。」

ワードは田にこじまさせていた涙を拭

い、倒れているポケモンに駆け寄った。

「ねえ、キミ、大丈夫?」

そのポケモンから返事は返ってこない。

「ねえ、ねえってばー。」

やはり返事はない。

「ねえってば、起きてよーねえー。」

ワニーノロはしだいに焦る。

「ねえってーもしかして、死んでるの?」

“死んでいる”その言葉を自分で呟つておき

ながら、ワニーノロは震え出した。

(ま、まさか…本当に…)

ワニーノロの恐怖がピークに達しよつとし

た、その時だった。

「ア…ん…」

そのポケモンが、小さくうめきながら立ち上

がった。

「ああひー...呑かつたあ～～～。」

ワニーハーモが思わず安堵のため息をもらす。

「誰も死んじやこな…………ひー...つ。」

そのポケモンは、ワニーハーモと田代が合ひた途端に、あんぐりと口を開け、ひどく驚いた表情をした。

ワニーハーモもとろとしながら聞いた。

「どうしたの？そんなに驚いて」

ポケモンはひに驚きながら聞いた。

「ワニーハーモが.....しゃべった.....ー？」

「え？」

「ワニーハーモがやむむとんとした。

「オレがしゃべるのが...そんなに...変？」

その言葉を聞いて、ポケモンは驚いた。

ワニーハーモは今度は眉をひそめながら聞いた。

「キ!!、ちょっと変わってるね。ポケモンの世界なんだから、オレがしゃべっててもおかしくないだろ?」

「変わってるのはお前の方じゃないのか?」

「え?」

ポケモンの発言で、ワニノ「せまあきょとん

とした。

ポケモンはさらに続けた。

「ijiはポケモンの世界なんだろ?じゃあ何

でお前は人間を前にして驚かねえんだ?」

「えつ!?.人間!?.」

その言葉を聞いた途端、ワニノ「がすつとん

きょうつな声を上げた。

「人間 なんて、どじこいるの?」

「俺が見えねえのか?」

「何言ひたの~キリ、どう見てもキモリ」

「じゃん。」

「ーー?」

キモリと呼ばれたポケモンはこの上なく驚いた表情をしたあと、身体中を見渡した。

(黄緑色の身体に腹が赤い……ーそれにこの

濃い緑色の尻尾……ーー)

見渡しながら身体の特徴を中心で言つて、そして愕然とした。

「俺…………キモリ…………」

やつ言いかけて口をつぐんだ。

(俺、何でキモリなんかに…………あれ?…)

キモリは必死に記憶をたどりつつするが、

何も思い出せない。

(「…………」) もしかして、記憶

喪失つてやつたんだ！？ 何故！？)

考えれば考えるほど混乱していくキモリを見

て、ワーノンはポカーンとしていた。

(本当に……変わっているのかも…………。)

やつ思いながらも、ワーノンせとつあえずと

いう感じで切り出した。

「…………」 まだ名前を聞いてなかつた

ね。オレはべウ。キミは～。

ベウと名乗ったワーノンは、険しい顔で考へ

続けるキモリに問いかけた。キモリはべウを

少し見たあと、また考えた。

(俺の…………名前…………)

少しの間、沈黙の時間が流れた。

「…………もしかして、名前も思い出せない

の?」

ベウが恐る恐る訪ねた。キモリは答えない。
「『めん、答えにいく質問して。なんだつたら答へなくとも……』

「三ウ。」

突然キモリは答えた。しかしいきなりだつた

ためか、ベウは「え?」と聞き返した。

キモリは繰り返した。

「三ウ。木陰　　葉(ウカゲ　　三ウ)だ。」

三ウと名乗ったキモリはまた考えだした。

そんな三ウにベウはそつと手を差し出した。

けげんな顔をした三ウに、ベウは言った。

「よひしへ、三ウ。」

その言葉を聞いた三ウは、とりあえず普通の

表情に戻し、ベウの手を握った。

#モニターリング（後書き）

ベウ「お前もつたいぶりすぎだろ…………」

それは多分今回の話の一一番の反省点。自分でも書きながらまざいかもって思つてた。

三ウ「まづいのは作者のテスト勉強じゃなくてか? (笑)」

……この場でテストの話禁止令…… (泣)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8794y/>

ポケモン不思議のダンジョン～葉の救助隊～

2011年11月26日20時10分発行